

山崎元一 著

## アシヨールカ王伝説の研究

宇治谷 顕

インド古代史を考えるに当って、政治史・宗教史ともに、アシヨールカ王の占める重要性は申すまでもない。アシヨールカ王伝説の考究は、アシヨールカ王碑文の研究・解明とともに逐次すめられつつあるが、史実と後世の伝説作者の創作との区別が難然としており、それがこの道にたずさわる学者達の課題となっている。

本書は、従来のアシヨールカ王伝説に関する解釈・研究等を再吟味することに重点を置き、古代インドの政治史・宗教史研究に綿密な考究を展開し、アシヨールカ王伝説に関する史実性を探ることを中核とした労作である。従来、アシヨールカ王についての史実を物語る重要な資料は、主として王が摩崖や石柱に刻ませた碑文を中心にして解明せられてきた。それに対して、著者は「宗教文献に伝えられるアシヨールカ王伝説の中にも、碑文からは窺い知ることができない貴重な史実が隠されている」とし、この研究の目指すところの一つは「その伝説の分析を通して、アシヨールカ王時代の政治的・宗教的史実を解明することであり、今一つは、アシヨールカ王伝説の伝播・受容・攻変の過程の分析

を通して、インド文化の伝播の一面を明らかにすることである」(本書四頁)と論じているところに異彩がある。

本書の構成は、序章から第七章までの本篇と、付篇としての三章とから成り、他に索引・英文梗概・地図を添付している。全篇の叙述は、従来から提唱されているアシヨールカ王伝説に関する諸学説を数多く採録し、研究史回顧の意味を込めつつ、その是非を問うなかで著者自身の学説を展開している。以下、順を追ってこの労作の一端を紹介することにする。

### 一

本書は序章において、研究の目的・史料・方法論を掲げ、特に第三節の研究方法においては、アシヨールカ王伝説が現在に至った過程を段階的に三つの時代、すなわち、(1)アシヨールカ王存位中から死後二十〜三十年まで、(2)マウリア帝国が崩壊し始め佛教の地方分散が起った時代、(3)佛教の地方化・分散が一層進んだ時代(本書二十一頁)、に分けている。この過程を経て成立したアシヨールカ王伝説を分析し、その中に含まれる史実を抽出しようとし、その方法論として以下の手続きをとっている。

- (1) 伝説の個々について構成内容を分析。
- (2) 同じ系統に属するが、成立年代を異にする伝承の比較検討。
- (3) 系統を異にする諸伝承の比較検討。
- (4) 常套的な手法により、その背後の史実を探る。
- (5) 佛教文献以外の史料・碑文等の比較研究。

(本書一二〜二三頁)

このような手続きをもって伝説を考究する場合、著者も述懐しているように、現在に伝えられている伝承からその伝説発生の源にまで遡る推測を、どの程度まで推し進めるかが問題となる。この点、著者はかなり大胆な推測をおこなっている。言うまでもなく、アシヨーカ王伝説の研究・解明は十分な資料もなく、推論を余儀なくされる部分が多いため、決定的結論を導き出すことは至難の業である。そういう状況のなかで、著者が本書において提示する仮説は、今後の研究に多大な寄与をなすものであり、従来、諸説の紹介に終始して結論的解釈を引き出し得なかったこの種の問題に、ある種の結論を提示していることは評価されるべきである。以下、所論の項目に従って著者の推測を検討しつつ、本書の内容を一瞥することにする。

## 二

本論第一章・第二章は、アシヨーカ王の生涯について佛教改宗以前と佛教改宗以後に大別して、南北両伝承のアシヨーカ王伝説、タールナータの『インド佛教史』、カルハナの『カシユミール王統史』等の文献を引用し、これらとアシヨーカ王の法勅とを対比しつつ解明を試みている。この中で、金倉円照博士によつて「今日実証できない事柄で故意にもとづく部分」(『印度中世精神史』上二〇五頁)と指摘された諸問題についても詳細な解明が施されている。金倉博士は、教化を目的とした編輯の意図が重んぜられ、史実性が軽視せられ曲げられていることは拭えない、としながらも「ただ帰佛以後の法アシヨーカと、帰佛

以前の悪アシヨーカとを対照し、佛法の教化力を誇示するためにのみ、作者がかような事件を、故意に創作したとは信じがたい」(上掲書二〇五頁)と論じて伝説中に史実性を推測する余地を残している。これに対し著者は、アシヨーカの佛教改宗を際立たせるための一手法として、王子時代には勝れた素質を持つとされていたアシヨーカが王位継承前後から唐突に暴虐性を持った人間として描かれているのである、と説明している。そして、アシヨーカ王改宗の史実は伝説に語られるような突然の出来事ではなく、伝説上のアシヨーカ王の改宗は、一介の出家者と大王というコントラストの妙による佛教の偉大さ・佛法の尊さを強調しようとした伝説作者の創作による、と論じている。

改宗の過程については、次の三段階を経てなされたと論じる。

(一)改宗以前、佛教へのある程度の関心。

(二)カリンガ戦争以後、ウバーサカたることの表明。

(三)一年後に始まるサンガへの接近。(本書六十四頁)

ここで特筆されるべきは、(二)から(三)に至るまでの過程を詳細に究明していることである。これはアシヨーカ王法勅中最も難解な部分の一つとされ、またその解釈についても諸学者の間で各様の論議が出されている問題である。著者はウバーサカに関する小摩崖法勅の記事とカリンガ戦争後アシヨーカ王が佛教に急速に接近していく事実との間に、何らかの關係が存在するという仮定のもとに、改宗の年代や改宗後の信仰生活を明らかにしようとする。結論として、カリンガ戦争がアシヨーカ王を佛教に引き入れる転機となったという通説に対し、戦争以前す

でに佛教信者になっており、戦争の惨状を見て痛く悔恨し、僧伽（サンガ）に入り熱心な佛教信者となったもの、と論究している。

さらに、改宗後のアショカ王の業績として、佛塔建立と佛跡巡拝とが言及されている。アショカ王の佛塔建立については、南北両伝承が互いに甚しく内容を異にしているが、この点については、平川彰博士が解説しているように、「南方伝承は、スリランカ上座部が塔崇拜よりも、むしろ佛教教団供養を勧めているため」（初期大乘仏教の研究六〇五—六〇九頁参照）と論じる。

佛塔建立で非常に興味ある問題は、八万四千塔建立の史実性もさることながら「佛骨八分の伝説」の史実性の解釈である。かつて中村元博士によって唱えられた「佛骨八分の伝説に史実性は存在しない」（宗教と社会倫理二三—二三四頁）という解釈に論究して、著者は、この問題の史実性を探る論拠として、すでに埋葬された聖者の遺骨を取り出して再分配することが当時の佛教徒の間で実行されていたことを立証し、アショカ王による佛塔開掘・佛骨回収の史実性を主張する。このような立証のもと「佛骨八分の伝説」を伝説作者の創作と一方的に決めつける見解に反駁する立場を明確に打ち出した点、向後この研究分野の指標ともなう。

### 三

第三章では、第三結集と諸方教化の問題が取りあげられ、諸資料を披閲しつつ歴史的事実を解明している。これらの問題に

関しては、矛盾する南北両伝承の伝説から決定的な解釈を導き出すことは不可能である。史実とみなされる内容をもつ碑文等にも、第三結集の記載は極めて少なく、その解明は非常に困難な問題である。それゆえに現在まで、この分野において決定的な解釈を与えるほどの研究成果は皆無に近い。このような現況の中で、著者が本書で示した総合的で広範囲な研究内容と成果は十分評価されるべきものである。

第三結集とは、南方伝承の伝説でありスリランカ上座部の伝承である、という見解が従来通説であり、この伝承に関して、その史実性の如何が多くの学者の間で論争されているが、いまだ統一の見解をみるまでに至っていない。しかし、およそ第三結集についての見解は、以下の三種に大別される。

(1) 伝説内容を無批判に認める。

(2) 第三結集はパータリプトラにおける一派の会合にすぎないとする。

(3) 第三結集はまったくの虚構であるととする。

右の諸見解の中で、(1)の説を主張する学者は現在ではほとんど皆無であり、(2)ないし(3)の見解を主張するのが大半である。

しかし、なお決定的解釈を下す説は見られない。平川博士は「第三結集があったとしても、それは上座部のみの一党派内での結集であろう」といい「第三結集を全く否定するのは妥当ではなからう」（『インド佛教史』上巻一四八—一五〇頁）と柔軟に論及している。塚本啓祥博士は「伝説の一部の矛盾を論拠として、伝説そのものの虚構を論じることは、伝説中に含まれる歴史性

の一面を見落す危険がある」『アショカ王』三三〇頁と論じ、南方伝承を伝説作者の創作と認めながらも、決定的裁定を下すまでには至っていない。

これに対して著者は、まず、第一・第二結集により佛教の正統が維持されて来たという史実を確認し、次いで第三結集の主宰の師と見なされるモッガリプッタ・ティッサの存在の史実性を考究し、それによって第三結集の成立過程を論じている。このような推考の過程を経て、第三結集は「佛教発生の地マガダで正統と認められた佛説が直接スリランカに伝わったことを主張する為、スリランカ佛僧の手によって第三結集の伝説を置くことを必要とした」(本書一二八頁)と論じ、さらにスリランカに佛教が伝播した由来・経路を詳細に検討して、それを右の推考の拠りどころとしている。なお、北伝にいうパータリプトラ結集に関しては、マハーデーヴァについての詳細な考究を加え、佛教分派史に論及している点にも注目したい。

#### 四

第四章には、マヒンダについて論じられているが、第四章は前章の問題と対比しながら考究するべき関連性がある。一般に、スリランカへの佛教伝播はマヒンダによってなされたという解釈が大勢を占めており、南方伝承に伝わるマヒンダ伝説は史実として了解されてきた。著者は本書において、マヒンダ伝説に関する過去の研究成果を広く渉猟し、それらの信憑性を探りつつ綿密な究明をおこなっている。なかでもマヒンダ伝説支持の

論拠となる諸事項を列挙し、その各々についての矛盾を指摘することによって、自らの推論の正当なことを実証しているところに、本書の一貫した研究態度が窺える。

また、マヒンダ伝説に関して、当時の社会状況・佛教伝播状況を詳察し、スリランカにおける佛教伝播は東インド經由によるとの説を排して、西インド經由説を主張している。さらにマヒンダ伝説の成立過程を論じ、従来通説とされてきたところを大胆に反駁しているのが注目される。

以下第五章に入り、北方伝承による三人の王師ウバグプタ・ヤシヤス・モッガリプッタティッサについて考究を重ね、それらの考究をもとにして、佛滅年代に論及している。インド佛教史において、最も難解な問題の一つとされるのが佛滅年代考である。いうまでもなく、佛滅年代をアショカ王の灌頂や即位の年代から算定することの重要性は周知のことである。しかし本書において、諸文献・諸碑文等の資料について幅広い詳察がなされているのに比べて、年代論に関しては、特に深い考究がなされていないように思われる点は、憾みを遺す。

#### 五

次に六章・七章・付篇と続き、アショカ王個人に関連する諸問題が論じられているが、この問題はすでに諸先輩の研究成果により比較的詳らかにされている分野である。本書は、現在までに提唱せられた幾多の諸見解を整理・按配している点、アショカ王にまつわる社会性を探る入門書として、通読して大変

便利である。

付篇の後半には「ダルマの政治」「于闐国建国の伝説」などの興味ある問題が論及せられている。アシヨーカ王の「ダルマ」の概念については、これまでも幾多の諸先輩によって考究せられているが、確実な資料の不足のため「ダルマ」の概念に決定的解釈を下すまでには至っていない。本書における「ダルマ」の概念に関する解釈も、従来の通説をいくぶん明確にしたという以上には出ない。しかし、著者が本書中に用いた数多くの資料、その内容考察、さらに諸説を対比しながらの研究方法は、今後アシヨーカ王研究を意図する後学の資として重んぜられるべきものであらう。

最後に「于闐の建国伝説」とアシヨーカ王伝説との関係を論じている。于闐建国の伝説については、寺本婉雅・羽溪了諦両博士により詳細な研究が施されているが、それら先輩の研究成果を紹介しつつ、著者は伝説中における史実性の解明という、本書に一貫した姿勢でもって論及している。結論として「于闐の建国伝説は、『于闐年代記』の編者が、すでに成立していた建国伝説と、于闐内の寺院に伝わるマガダ王統史や、于闐王統

史などを参照しつつ、新たに建国を佛滅後二三四年とする伝説を組み直した」（本書三四三頁）と推論していることは、現在の研究状況からして容認されうべきであらう。

## 六

以上、本書の内容を概観してみたのであるが、アシヨーカ王伝説の研究は、現存する資料が繁雑であるため論究はなお推測の域を脱し得ず、したがってその史実性の追求が根本課題とされている状況下において、著者が伝説に精緻な史実性の吟味と解明をおこなって、アシヨーカ王研究に新生面を開き得たことは、大きな功績であらう。この有意義な研究成果を基として、この問題に関連してさらに一層の討究が積み重ねられ、史実性を裏付ける素因となるアシヨーカ王碑文等の解明が著者によって進められることを期待すると共に、それはまた我々後学に課せられた緊要な責務でもあることを痛感するものである。

（昭和五十四年二月 春秋社刊、A5版三五〇頁 英文概要二七頁、索引二〇頁 五、五〇〇頁）